

入院して気付かされたこと

「まったく、いびきがうるさくて一晩中眠れやしない」とブツブツ。これは私が2月末より11日間入院の折、病室に入って最初に耳に入ってきた一言です。4人部屋で隣のベッドにいらしたおばあちゃんの声でした。

びっくりし気の小さい私はドキドキしました。言われた方のことを思うと気の毒に思いながらも新入りの私は聞き流しておりました。

しかしそのおばあさんが何かにつけイライラと文句を言っている姿を眺めていますと、ふとこんな時、亡くなった母ならどの様に接していかれるのだろうと静かに考えてみました。

「そうだ！お話し相手になって差し上げよう」と決め、私から話しかけるようにしたところ、だんだんと心も打ち解けそのうちおばあちゃんからご自分の97年の人生の思い出をいっぱい話されるようになって穏やかに「そうかい」「そうかい」と私の話しにも頷いてくださるようになられたのです。

しかしすぐ「家に帰りたいよ～家に帰りたいよ～」とおっしゃり「家に帰ると娘に迷惑をかけるから次の病院に行かなくてはならないんだよ。」「ああ長生きしすぎた。死にたい。死にたい。」そう言われるのです。「せっかくいただいた命ですもの。そんなこと言わないの。」となぐさめることしかできませんでした。

どんな生き方をした人間も、もらさず救う。生き続けて欲しいと阿弥陀様は願いをかけ通しなのです。その願いを心にしっかりと受け止めていけば、どんな状況の中からも「生き続けよう！」との意欲がわき上がり、私たちの心に大いなる安らかさをもたらしてくださるのです。

こんな詩が目に入りました。

「九十の人生かみしめ 一向にわれは信ずる わが道を行く」

自分の生涯をすべてありのままに引き受けて自分の人生を最後まで生ききっていこうという詩に感動させられました。

入院最後の日に「寂しいから私に黙ってそっと出て行ってね。」と言われました。一言お手紙を添えて静かに部屋を出てきました。深く考えさせられた入院生活でした。

本弘寺 坊守



会員さんが感動した詩をお届けします

「お仏壇のある家はしあわせ」

お仏壇のある家はしあわせ 仏様とお話できるから
ないものねだりで日が暮れて
人は不足を口にするけど
貧しいときほど仏前に座り
お線香の香りの中で
黙々と合掌してごらん
その手の向こうに耳をかたむけてごらん
欲張りいうなど叱られて
謙虚になれよと諭されて
頑張りなさいと励まされる (作者不明)



「救い」

難しいことなんかなんにもなかった
たった一言のなんでもない言葉が
この胸におちればそれで良かったのだ

浅田正作著「念仏詩集 骨道を行く」より

花まつりと初参式しよさんしき（初参り）のお知らせ

当寺では毎年4月8日午後1時より鳳凰殿にてお釈迦様のお誕生をお祝いさせていただき花まつりを厳修させていただいております。皆さんとお経をいただいたあと、恒例の邦楽演奏会も開催されます。軽食を用意してお待ちしておりますので皆様どうぞお参りください。

また昨年より合同の初参式も執り行わせていただいております。赤ちゃんがお生まれになると、なんの疑問もなく神社でお宮参りをしていませんか？仏教徒の私たちはお寺でお参りするのが正しい姿です。

昨年はふたりの赤ちゃんが初参りをお受けになりました。どうぞ皆さんの赤ちゃんが不思議なご縁によって生まれくださった喜びを本弘寺で一緒にお祝いたしましょう。お問い合わせはお寺まで。

合掌

